

「楼閣山水之図」についての建築的所見

平城宮跡発掘調査部

二条大路北側の東西大溝 SD5300で、多数の木簡、木製品とともに建築群を描いた折敷の底板を発見した。図柄を検討してこの建築群を「楼閣山水之図」と呼ぶことにした。現存するのは長さ61.3cm、幅10.8cm、厚さ0.8cm前後で、全体の1/3ほどと思われ、材質はヒノキである。伴出した木簡の年代から、この板絵は天平八年前後に描いたと考えられる。

この板には片面に「楼閣山水之図」と千字文の習書があり、他の一面には人物の全身像や顔の絵の習書がある。「楼閣山水之図」は建物群・築地塀・池・山からなり、楼閣を中心として両脇に建物二棟、門二棟があり、建物は全部で七棟ある。広大な空間を表現しており、建物を大小に描き、遠近を表現する点や建物群を斜め上方から見下ろす点では、描写技法は相当進んでいる。

門二棟を除く建物五棟はすべて寄棟造りである。門は切妻造り。門二棟、建物五棟の内の三棟と、塀は基壇上に建つ。建物には組物を表示するものがあり、手前の門の妻に投首を描く。建物群の前後に築地塀・磚塀があり、建物群を囲っているようである。手前の築地塀には花模様がある。各部分を丁寧にみると、リアルな部分と省略とがある。池の立体的表現、門の柱筋を前後に書き分ける点、山腹に流れ落ちる滝と落下する水のしぶきはリアルである。一方屋根の形状が部分的には入母屋造りにも見える点、階段が建物正面のあるべき個所がないこと、鵲尾を描かないこと、瓦葺きの表現が塀の一部に限られることなどは省略かもしれない。

建物群背後のそびえ立つ山や花模様を描きしかもカーブする塀など、日本の建物群とは思えない図柄であり、中国伝来の絵画を写したものであろう。塀に花模様があることについて、中国の『書

経』・『春秋左氏伝』に「雕牆」、『礼記』に「疏屏」とあり、春秋時代から壁を飾ることがわかる。正倉院に残る『東大寺献物帳』には「大唐古様宮殿画屏風」があり、中国伝来の絵画が奈良時代の日本にあったことがわかる。「楼閣山水之図」の下には、後に写経所で校正を務めた「阿刀酒主」の名があって、習書や絵画を書き描いた人物の可能性はある。

「楼閣山水之図」が描く建物群が仏教寺院、道教寺院のいずれとするか決め手を欠くし、離宮といった施設の可能性も考えられるし、また補陀落山を描いたとする説もある。

七・八世紀の年代で建物を描いた絵としては七世紀後半の玉虫厨子の壁に描かれた建物、奈良時代の「東大寺山堺四至図」がある。いずれも建物の表現は、建物を正面から見た平板的描写である。正倉院の宝物には山水を描く絵画はあるものの建物と組み合わせる山水の図柄はない。「楼閣山水之図」は建物群と山水を立体的に描く絵画資料として、一級の作品である。

(上野邦一)